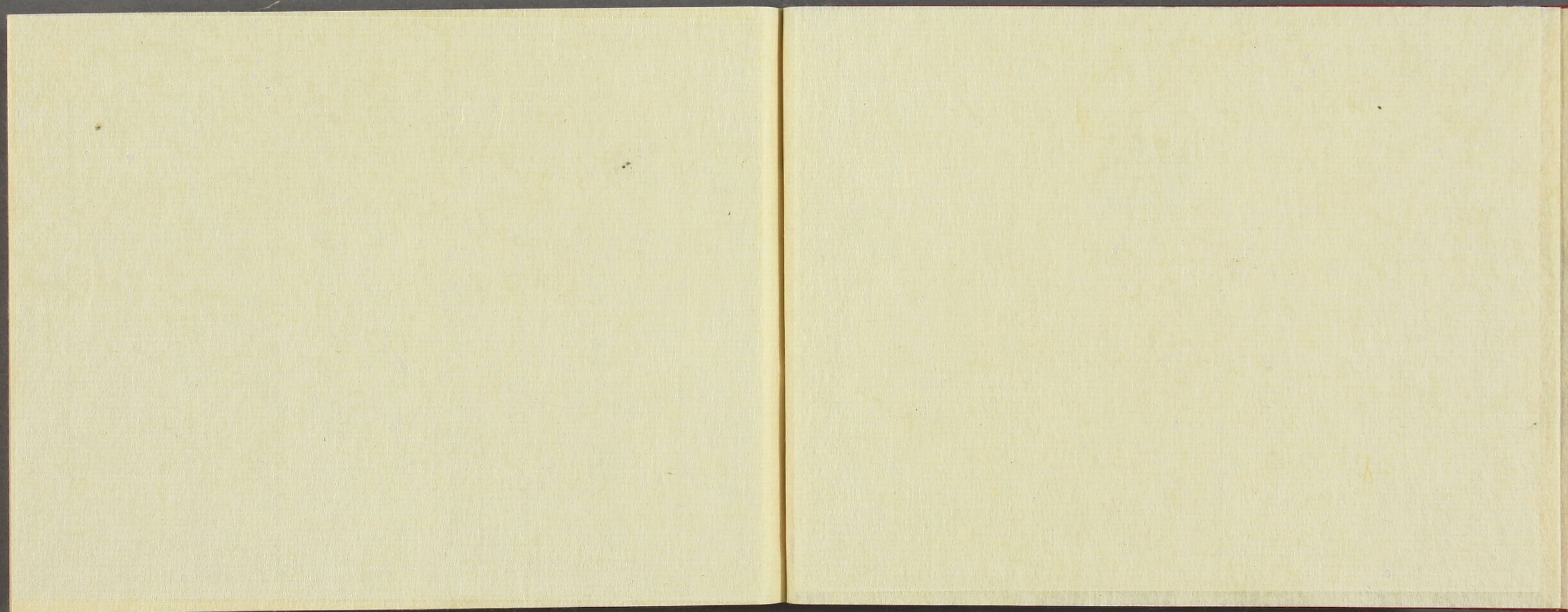




編





角總

次歌并詞為卷若

あけしはなをの比美りひほひ
あやう—所まよりとあまかん
詞よいあけもはなをそまれ
にとりな—もむらけはら
もろりれつるれももあう
あけまもいに二あり 音もも
何をせれと云 髪もつ—と
にあけするらぬ又事あま

系よりくくくくくくくくくく
只はあけくくくく系より
とくくくくくく
秘あややん神系よりは総角
とくけんきんめん地得系
くは角総よりきりこれ
と系よりくくくくくく
りくくくくは得馬業を
用へんきん蓋くくくく
くくくくくくくく

推本はくくくくくくくく
くありは巻はくくく
年れきんくくくく

あまたしきみなるれはう
け常に多年すまるとし
あつとも八文蕨一輪
て今も一や言わくよ
おまろし一にきつ也
西くそのこと 父を去年
八月吉日にうもあつは
一目も也

あよにやあつこの事
宇治乃娘君には髪装衣

権佐しやあつこの事

まきあつしやあつこの事

あつはあつしやあつこの事

あつはあつしやあつこの事

あつはあつしやあつこの事

あつはあつしやあつこの事

あつはあつしやあつこの事

あつはあつしやあつこの事

あつはあつしやあつこの事

あつはあつしやあつこの事

一周忌より〜着脱をぬ
き給也えうと鈍はあ
らうり忌月より吉時
改まる也

ふ〜〜れ^糸しきたり
為香 香る香合入
つみり糸いむとひ
杖よ校へ机よとく也
ふれ机乃四方の角結
と垂糸と角結と云也

私着香袋の角結する
つじん

か〜〜めら

身^せひ〜と早ふはは物
〜〜〜物有け
姫君さられ口すさる也

むすしあ〜〜
〜〜〜物也
百^ひ子か〜〜
〜は〜〜

中
定式武線柱との記号

多しりともゆんり糸く

しくれり也

板園柱をとりし物也

糸を

糸竅の内にもあり也

る糸もしくそ 葦乃

糸香乃糸とん物也

糸後と玉子

くつらんむありまうて也

糸さめくの糸むらんすけり

志もちらん今にはあり也

糸いりやつくりきしまに

糸いと糸いと糸いと糸いと

糸いと糸いと糸いと糸いと

糸いと糸いと糸いと糸いと

糸いと糸いと糸いと糸いと

糸いと糸いと糸いと糸いと

糸いと糸いと糸いと糸いと

糸いと糸いと糸いと糸いと

糸いと糸いと糸いと糸いと

蓋乃姫君の系びり如
つる事似たりそくそり
いよのごとこ 此御也
つらけ云詞也
四條大納言新撰髓腦云
つせりこの中務君と云
つらり云云

本胡文粹云徒然弹琴
者圓卷祢弁御俗謂者
女為御蓋取丈人女御

之義

今世は御乃字に付
呼同事也

こればちりよやう

系りたる物あり別為の
公印そくもたむおゆる
姫君の公中也は世ちり此
別ハ生別也ろけりよ
しゆり死別いよもと
ろろり也蓋り返る也

らぬんいつ侍 くらてと
ししてきく物とはきく
ぬる中も也

御くもんもんつくり

船久乃乃子何因衆の意

よ中讀くもるもく

はすいり乃ついで

意れ又乃まびのし

あきやんはなるん此葉り

意中も 借る末也

あけ中記わしらもり
さうしてねんれんもわらひ

あしななりつよりあしな

きり と業しらもりは

八尺もり也さうして業

れきりしちび人のさうわ

ねんちよそんさる也

定家公命也

あましくもむすもきりたる葉り

伊あまを記れなりあしん

董の我んをほめてさし
しる也まういひあひまう
むむ也角然るむすもれら
わういあむむ也

おませあつてもうに後の
後のむいもろくうあむ
ぬ也うぬま行とたうに
むむすむむむもすむ
ふちれも中う凡種も
らぬ也

あむむむむむ

かゝるまむこちしむむむ
あむむむむむむむむ
董のち中早すむむ也
むむむむむむむむ

董乃我身はむむむの
つーけちるむむむも
えのぬまう白むむむ
らぬも也

むむむむむむむむ

白ふはらうとて 葦の調し
白ふはらうと入まじりし
ねとらうらうとやあられ
うらにこちのつれちよは
きしやあふわらね
て葦の足あこしてあ
らみらうはとあまうけな
高実と又ねらうとあられ
と印とりつくりあうけ
あうらうとあ

よはりのさうらうと ねまの
あうらうとあうらうと
あうらうとあうらうと
あうらうとあうらうと
あうらうとあうらうと

うらうらうのこちあうらう
葦の表裏あうらうと
あうらうとあうらうと
あうらうとあうらうと
あうらうとあうらうと
あうらうとあうらうと
あうらうとあうらうと
あうらうとあうらうと

おはようございませう
何とも作らぬやうに
おはようございませう

今更らぬやうに
おはようございませう
らんとせ

おはようございませう
是より才更らぬやうに
おはようございませう
おはようございませう

おはようございませう
おはようございませう
おはようございませう
おはようございませう

おはようございませう
おはようございませう
おはようございませう
おはようございませう

おはようございませう
おはようございませう

出ありてはとて

へあれたるは

娘君のほろひ

わがにあら

いふよおほ

娘君さら別よ

乃あら

いふよおほ

昔の自然

いふよおほ

世のよき事とて

いふよおほ

いふよおほ

遠言ふす

いふよおほ

いふよおほ

いふよおほ

いふよ

いふよおほ

いふよおほ

身びすてく 我れは

くまふ人はむいふ行り

くまふ也

ゆてとは 心ふらむ也

くまふ也

むくむくく

心ふむ世の時を古ゆ

くくく

くくく

くくく

はまを射きぬくは
くくくくく
より仰るは物のか
くくくくく

仙人生羌 食松葉不飢壽

百七十余年 芝行爲衣

松葉爲食 此門隠士行也

くくく

樹下集 果のいり葉の

毎の月を法行の如く
と記はるし

金華山縁起役行者著
藤皮衣相系為食吸死
汁助保男命廿余年

いけつみのすけり

何とて終りをせん

すまふりす

る此はふも きつあ

何とて終りをせん

毎の月を法行の如く

と記はるし

る此はふも きつあ

何とて終りをせん

すまふりす

る此はふも きつあ

何とて終りをせん

すまふりす

る此はふも きつあ

何とて終りをせん

とろ

たろーしとろるんていよ

あねあねも申あはれあはれ

あはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

よのつねよ 世と乃此流のよ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

世中たあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

あれくくくくく

あああ

三条の宮 女之宮也

うきうきこちく

いづくも先はあ

うはあうあう

まうまう

大君の御

上御の御

ふれはるに

蒼きうらやう

いとも

おいらまた 甲斐

ももも 蒼も大君

記さるる

ももも 甲斐

中也

あさわう

ももも

ともも

わうしこらなる事大君
ありたりくさうゆけし也
たうしんしに わうみくら
なることいふあれ大いに
まうしくあふれなる事
はて對面し候也

ともおほなる事
董の唐語お也むいしを
礼也ちかきし候とくし
くわんれしを辨を憚る

兼也

しらとくしあぬ
大君の辨董ららふ志に
て早候也
かく知もたれ 董の心也
わんちちれ候もさうらん
ふいの也也
とれむしし
大君のら申也
らられしとす

大君詞也

つらけるにふつらなる
まとはなむ董の歌ゆ
よしとせりつらなる董の
おちまき也

あはれなる人とはい
とそら也

つらけるにふつらなる
陽うくしはくしとせ
し董のつらなる知

よめ粹なるにふつらなる
つらなる也

つらなるにふつらなる

あはれなるにふつらなる
よめ粹なるにふつらなる

つらなるにふつらなる

せにふつらなるにふつらなる

あはれなるにふつらなる

いふにふつらなるにふつらなる

つらなる也

かゝく此節もあら

前々仙にあらはれ

くも人にもあら

我らもくさおる人

羞のあらはるも我

らに又くもあらは

おとちるもあら

まゝのあすも

今もくさあらは

ゝゝゝあらは

羞れりもあらは

らるも

ゆゑに袖も 眼も

あゝゝゝゝゝ

あゝゝゝゝゝ

あゝ

ゝゝゝゝゝゝ

羞のあらはるも

とけもあらはる

けゝゝゝゝゝゝ

かゝるにせしむ

羞めようくあつに大なる

る中し極端うとも

袖乃とをとしよひけ

眼長びのこしらぬをよ

こしらぬくちれあ

まねも羞にあらし

あつちあつちあつち

こぢなをいふこ

まぢなをいふこ

とも父もとせあり

とせあり

中くちあつちあつち

今とせし實なる

つねにあらせし家

物うものゆゑあり

事うとも

あり明の目氣

よ一娘はあつち

つちあつちあつち

邊風吹断秋心緒
流水流添夜淚行
後江相云

馬ともろいさゆらけとも

晨雞再鳴残月没征馬

連嘶行人出白

いりみみゆらけり

障子也明了らに輝也

知もさるる新乃

見くは軒也

うらみさしきり

あふにあらはさるる也

おつとくは対面あらは

おれつとくはのこも也

白詞也

いともうたさるるよふ

村を乃さるる我名とあふ

よふの物もさるるあふ

よふのあふさるる

ふらぬあふさるる早晨也

山乃鐘をさるる

とよまひのこころも一はは
明もさへいりしとも也
よあうりやの明も
さあはまあしうも
りも也
又人はいひしや
人の新物とありしや
うにもあはれしや
とよまひのこころも
白後さきよきよ

と明もさへいりしとも也
あつ月たもあはれ
またさあはれもあはれ
るも人にもあはれ
まはれし

晨能再唱残月没征
連嘶——以始末也

あはれなるものぞ

薫るもよりのあはれなる
いふの原も舞の虫も
公なるもよりのいひ又村
をたしとらさるよふおぬ
もふれあしこの鐘乃
もよははるもよりのよ
のあしんとらして涙ぐ
よ言ちさるもよりのあ
はれなるもよりの也後集
す

曉のぬの影をりちれば
鳥あよむ時おぬのよ

とらねし来こぬ

あはれなるもよりのあはれ
ゆればとらねし来こぬ
世のうらまはしに世の意
のよはる

行ぬあはれなる

あはれなるもよりのあはれ
とらねし来こぬ

あはれなることなり

前乃守れる也あはれなる

証とてしるは 故なる

乃我もまうしあひたり

とも申すおはさん

ひしは也

日このまうあひ

故害なる也

くこあも 行香あけよ

能乃能也

あはれなることなり 公衆とて

しるはれし証作りてつら

也常はは全りしを証

これとあひし証とてし

する也

あはれなることなり 一因也

乃日さる也

月このまうあひ

志日さるし重服をあひ

其月中の煙服とあひ

何れ日と撰りて後をりて

去服と名する也

らくともりしとい 葦ふみ

きたりともちりていふ

とりはきと也

あむよりいふ

葦ふみ媒すつふとたふの

早ぬ也

乃人のい ちり也服衣

改しつ九月也ちりん

ちりつ八月たうらに又お

ししら也

公あむまりしてつ也乃

事記り物つ也

ちみよりい 是よりぬ

ふよ姫きんかぬ也

進いのかして 弁也

こはるものこ けもは

ちり也

きしつれらぬらん

善きとみちしむるに
申すにしあはれと
うらやまの心
もてしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと

いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと

いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと

いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと
いふにしあはれと

ついでに

よむにいつていへば 姫君乃中君
は地なりし物とも 昔の事あり
らむとては 跡もなきに
いふとては ぬきぬき
物もなきに ありあり
繪もなきに 人乃讀まむ
只もなきに けしき
とありとて 大君乃心し
る也

きし記さるるを 申書よ
大君乃心しとす
てはおほし 一なり
也

よむにいつていへば 姫君乃中君
は地なりし物とも 昔の事あり

私勅控念

あふれもたれも 地と白
下に清く ねもあふ
也

秘しゆくはめる雷は龍
身はついでこそあらぬ世に
むしつらむむしむし

大君鯛のまは遠言也

おんをうよの 姫君のま

の在世の母なりと成始

て彼言乃は出家と物も

早つこ也

今何よ 遠言ぶらり

ともさうりとも也

けよさのいぬれ也

つ穂乃也大君申免つ穂

= 獨任りしるさる也

まさしよよのつねな

尋常れ母乃やうにんてん

つしあを始つ也

いよおやをいに

申免乃也

ひしこらを始ぬ

坂又ふ乃大君一人とま

うし作をうけしは
我も何事やうと也

うらうらうとあはれ

故宮乃申君とては程さ

わづかにこそはさるる

つれも也

公がそははるるさきよ

大君の心かきくしておぼ

ちくさきよいこいよ

胡夕あしうしりておらこ

うと也

程はしき 大君朝也

らぬ人の何の事也

うし作をうけしは

并君の朝也

うと也

うらうらうとあはれ

大君の心也

ひもこそら 父もそは母

うと也

世にのたまふ

あふまふ入るもつらん
乃らあはれ吉服に政を
まうつる也

おまらう一むむ

世中とらう一むむ
あはれくさむおる一むむ
とらう一むむありても隠
つれおるなれも乃らあ
らう一むむ

かくむむむに 題證也

あはれちるらん也
く狭小の心也

七はむむとらうらぬ

年暮の前よ用意あり
けよみくさるむむむ
老ひのちるむむ也

とらうらむむむ

大君の命は乃ら朝也
意乃風流のこらあ

公よをさうと年比乃る
し一紙書とまよ今は万
のふいふとてふた
と也

早のしとてふた
ちまよとまよとてふた
ううとてふた

世よんがはあふゆ
まよとまよとてふた
あは行のまよとてふた

とん也

まよとてふた

ちまよとてふた

しとてふた

と也

こまよとてふた 申也

つとまよとてふた ちまよとてふた

居も申も故あまくと

まよとてふた

あまよとてふた ちまよとてふた

言ふ人ぬおちる中
成大志とおちる中
おちる也

身はけしる知の中
おちる中
大志は身はけしる中
しる中
おちる中
けしる中
おちる中

何のこゝろか

弁調也
さばえおちる
おちる也
またうちる中
恨みは中
富よ引合も
おちる也
弁のおちる也

ゆゑにわろのうゝおぢいさまに
二おの父さま母お方もある人
存生よりいふはつういふ
ととも白き葦花おちるを
解にちうくしてはぬもむ
事はありこころいふ
りしれはらばいふこころ
行末乃幸取幸いふと
れいふ也
こゝれいふいふ

八まは遠言ふと一と
一とをばを理也彼を遠
まは可然人もちく品
ある人ようちとをぬ
とこをあり一と也
おののいふうち
葦のうすの若くは心し
けぬくま婦より
いふわろいふとの
しと也

かゝるついで 命にいつ
けり人なまされき
人はむらりよきす
るさし世をなれ
えさぬともく人のあ
らしき也
はしてくさるわ けさ
るは作り年とま
ありの死人なま
らきくさるわ

わけてるわつと又いひ
きりとりし雲のすきとわ
仙人の雲霞為家文選
雲は淮王宅をとり
詩に松岡霧に空煙火可
服朝来一片霞 又云
東は玉女裁春服常破
湘山尖片雲とも作れ
是皆道士仙人乃さ
とらり

うらやまのこころもわかれは
舟はさしめし家道よん
よをあらねといふもれか
さむらうらうらさうた
ほむせ也

またきこひあつねを

八月也

舟はのこさくつあは
ちるらうらさきらびき
いせ

いせ

大君おせしりふらふ
のこころをのこす叶ひ
いよあはれも
いせ

きはれい

善の朝也今は物らな
とも射るあり
いせ

おろしあは 大君申る

一研のおねのつゝもいなり
きしとくしゝん 羞乃
姉妹の差別をいふく
そりおんとも也
うらも浦とらにねんぬ
大君也
何んもさく 申さる也
あし浦も申さる也
大君の公也申さるあは
しゝるねんぬ 母さる

一とねね一とも也
よよさるゝるな 申さる
大君をたぢうも申さる
と也
今はとくしゝるにさる
いさるゝく思ねるに故
この事とたぢすもい
中納まゝいもいし
大君のさるゝれねんぬ
知ねんぬを申さる

独りゆくもよし

あさゆきけし

中君れさゆ也

又とくくく 大君乃

ゆくれゆくもよし

也

これゆきゆきゆき

中君也

あさゆくゆく 中君乃

ゆくゆくゆくゆく

ゆくゆくゆく

ゆくゆくゆく

中君の福世のゆき

也

ゆくゆくゆく

ゆくゆくゆく

愁殺ゆくゆく

ゆくゆくゆく

ゆくゆくゆく

おそゆくゆく

丁
能周乎枕云人れ申さる
能とあふみさる又あふ
りけと云荒神と云ん皇孫
考は國と云ていふと
一に流國の荒神と云
必と領と云て堂大いそく
うわくともう一青月蠅の
ささくともくつともいふ
たり又多ま石まるとも
皆おといふは荒神と云は

大己貴神 素戔嗚 領
号水子

新ひ也

^船世俗の誘ふ嫁すんは
色ぬれし神乃つくと也
万葉中二大伴安丸婿
大初言巨勢人女乎
玉着こちぬあまの子孫
能とつくといふあまの樹と
あふみさるあま
あふみさるあまの若より

あふ人へし秋のふさむ
大空をわく幸きうめ
あふ人へし秋のふさむ
さう

くわうあふも 昔のむら
あふ人へし秋のふさむ
あふ人へし秋のふさむ
あふ人へし秋のふさむ

あふ人へし秋のふさむ
あふ人へし秋のふさむ

あふ人へし秋のふさむ 申すは

申すは

あふ人へし秋のふさむ
あふ人へし秋のふさむ
あふ人へし秋のふさむ
あふ人へし秋のふさむ
あふ人へし秋のふさむ

あふ人へし秋のふさむ

あふ人へし秋のふさむ
あふ人へし秋のふさむ
あふ人へし秋のふさむ

ふんてち也巻し壁に
あつおちの道も也

可蟋蟀在壁月令

おけすんよの 中まの

おやしんよちるんよ

ふんてち也

おけしけちんよ 是中も

に巻のこけしる也

あつていすのりて

巻の方へ舟の集りて大

君のつれちの道もよあ

まふんてち也

まふんてちのつちまは

かねてちんよ 連てちん

ねちちまふんてちも

ふんてちちんよ

こふんてちる限をみ

てふんてちちんよ

と也ふんてちん

まふんてちちんよ

まづり終り念心

^中坂道のゆるぎ姫君を

たつと終極事とん

らつとく美しき人

も遠言ありし事

只つとまゝとるゝ又

弄つと終り也

おとと色姉君の中

とおととと終りし

しととととととと

くつとととととと

しとととととと

しとととととと

^破あまふけりこねと

るに親名鏡うち

面白

弄笑すれつとと

乃蓮の事ととと

つとととととと

ととととととと

早も也次詞言ちまの
とけしきまのくー大君
乃心とまきの奉するに白
字のふんふのうつて我
望し奉るよとひけり
つーまのーらあひま
申君を我よあつりけり
とらこくもん也け詞よ
まけいぬも弄れまじ
能ためあ

私すれこーおーと
とけつりけりけん
ノ字よりいぬも申君を
まけいぬもあひま
かけくまは
とけはた君も申君は
心ひけりま
まのまのけりま
自言に好色人なれん
とけりこくまのけり

大馬路にさへおきりぬ
とらふたぬ数あるま
ふらふく早ぬえん
—ぬ也

きりぬとも 飛ぬとも
なるも

いぬとも ぬぬとも
はぬぬぬぬぬぬぬぬ
ちぬぬぬぬぬぬぬぬ
とぬぬぬぬぬぬぬぬ

あゝぬぬ也

うらあゝぬぬぬぬぬぬ
進心サカシラマ口日本純とも
と老人方さーぬぬぬぬ
くぬぬ也

れいぬぬはうぬぬぬ

きりぬぬぬぬぬぬぬぬ
とらふちぬぬぬぬぬぬぬ
あゝぬぬぬぬぬぬぬぬ
おぬぬ也

早う也

坊うらんも 申えよらん

うまじも也

山姥のうしろにはまのねも

大石申えの心かもしる分

也 善なるの申えよらん

らしげ道うめ路を

う坊やうにるらん

ふりうしむるは

ことまゝなるも

思ふ人知る 善の申え

なる美別一知るは

ち善のくかひ知る

う

うめくなくくつれも

毛紐ぬくはう申え

は坊うらん知れ

ちくらんかひも

ちん

大石の善なるも

いにしへのうたはしるべし
我志よちかきくこころを
らんとも

さくしひつひちをわらさ
申すらんしんらん老人
乃云つらんとも世を
まじりちかきくとも
おんらんらんらん
昔の酒はあつても
らんらんらんらん

申すらんらんらん

大君をいささきしんあ
るは好色人のむくに申
君よつひちかきくお
にらんらんらんらん
すれとも

昔の酒はあつても

あつてもいささきしんあ
らんらんらんらん
つらんらんらんらん

して我常意ととせん

ととらぬ故なるん

之条は之をせう

女之宮作所ひ之条事

わけて古事記乃昔の方記

女之宮よりしは人の意

も同くは能く之を自意の

出さうしとあはし能く

ておらすわくたる由らち

しぬる也

おまじくもなへ

董の年より能く

はあはし能く

て多しれははと

く也

とてひの節も

董不昇階也

行ふはまも

同なるしよとの如し

丸なる也

ふらふらとわらふ

さきよのうらやまのうらやま

うらやまのうらやま

はらばらとわらふ

白きうらやまのうらやま

うらやまのうらやま

あつらひのうらやま

うらやまのうらやま

うら

うらやまのうらやま

さきよのうらやま

うらやまのうらやま

うらやまのうらやま

うらやまのうらやま

うらやまのうらやま

うらやまのうらやま

うら

うらやまのうらやま

うらやまのうらやま

うらやまのうらやま

とも昔ふらに胡の京な
まじし公にあらくきなり分
入てみる人ほくもと也自
言は公はしふいふの意
のいひおとらぬ也
あらうーは

秋の地しあまらにたそふ節
あらうーは
まきのまへくまのあま
あらうーは

やーこら 葦の公也白
言乃教年くく乃路也
人れ出ありきなり 中書人の
こころいっちるんとんも
ちうく葦のあまひー也
ちうくまのまららるー
かまらんと人申書行のま
アゆとらり
うらくまのあまひー
大君に申書人ゆらしん

きりぎりすのうらみ
いづちのうらみ

たまはたえ 昔のうらみ

君ははなつらつと

りつりつと 申さる

いふはなつらつと

はなつらつと

昔のうらみはなつらつと

いふはなつらつと

はなつらつと

昔のうらみ

いふはなつらつと

はなつらつと

いふはなつらつと

はなつらつと

いふはなつらつと

はなつらつと

いふはなつらつと

はなつらつと

いふはなつらつと

いとお預おのく波岸おん
は吉日おのくも也時証
昼夜日分ちるれしきもあ
るしき事こ

いふくさのひし

字後人自まを誘引
ぬれ也

まさのさな 白まは母所
からしおほくさ 白ま乃
切よおお事ちるれしき也

おちのさうちあまも

伊れいさうちあまも 橋娘
もみえさうちあまの公は
船とさうちい波泊瀬の
中おとら夕音れ鎖 ぬれ
とあれもいさうちあまも
橋よりいさうちあまの知
ぬれおにいさうちあまも
よの井人よも 白まを白
しぬともさうちあまもぬれ人

もちろぬともあつた
あつたともあつた
あつた地也

あつた地也 経営也

あつた地也

あつた地也

あつた地也
あつた地也
あつた地也

あつた地也
あつた地也
あつた地也

あつた地也
あつた地也
あつた地也
あつた地也
あつた地也
あつた地也
あつた地也
あつた地也
あつた地也
あつた地也

あつた地也
あつた地也
あつた地也
あつた地也
あつた地也
あつた地也
あつた地也
あつた地也
あつた地也
あつた地也

右の如き事しして

一言人君より對面して

中庭中ありとも也

たはしとらるる事なり

大君の御心とたはしと

さるる也さるるも毎日あり

れども也

しるる事あり 任意趣

也すれ分りしとえやは

しとも也

いふ事ありとてし

董の申ふ北方の事なり

いふ事ありとてし

いふ事ありとてし

いふ事ありとてし 并の詞也

大君申ふ事ありとてし

とおる事ありとてし

さるると 大君の事也

いふ事ありとてし 大君の事也

乃申ふ事ありとてし

公かすくもあはれ也

み入あはれ也 申す方
入あはれ也 申す方
子びきくたあはれ也
對面一也

しんしんしんしんしん

只一言中しんしんしん
しんしんしんしんしん
申す方申す方申す方
しんしんしんしんしん

意乃申す方申す方
大君びくしんしん
一也

しんしんしんしんしん
しんしんしんしんしん

しんしんしん

しんしんしんしん

しんしんしんしんしん
しんしんしんしんしん
しんしんしんしんしん

弁也

あまのうらひに人見くも

甚きは結句申意はとを

とててんもくもくも

あまのあまにむつよを

うらひに結句はむも目

しにうらひにむもくも

あまのうらひ也

うらひにむもくも

あまのうらひにむもくも

あまのうらひにむもくも

あまのうらひにむもくも

あまのうらひにむもくも

うらひ也

あまのうらひにむもくも

あまのうらひにむもくも

あまのうらひにむもくも

あまのうらひにむもくも

あまのうらひにむもくも

あまのうらひ也

かむしちりてしる

大なるは白きとあり

久敷も白き乃りて

中なるはあつちりて

ちりてかちりて

ちりてしる

ちりてしる

ちりてしる

ちりてしる

ちりてしる

ちりてしる

ちりてしる

ちりてしる

白き也

ちりてしる

ちりてしる

ちりてしる

ちりてしる

ちりてしる

ちりてしる

むらさきさき

事^紙あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

詞也

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

雄山、尾ノ隔て寝

いふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふも

らむる也

よふらむる也

あふらむる也

いふらむる也

給也

よふらむる也

わらむる也

さむらむる也

一也

さむらむる也

はらむる也

いふらむる也

るのやむる也

申すにむる也

よふらむる也

らむる也

あふらむる也

いふらむる也

はらむる也

さむらむる也

蒸はるるるるる糖餅
てありしるるる白
ちねるるる

宮ははははははははははは

後胡乃乃乃

大はははははははははは

申是のるる大是の是は

公はははははははははは

申是はははははははははは

是のるるるるるるるる

大君乃お君とはははは

是はははははははははは

大君乃ら也我はははは

一はははははははははは

ておはははははははは

はははははははははは

人ここのははははははは

乃るるるる知はははは

おはははははははははは

はははははははははは

お記ありおとすに

申す也

とれつおとすおとす

白ふおとす也必は明也

たつよつけしつたるぬ

公也さしゆくよきよき

ふとみおとすに流よこ

ちし今はうしりさる

く思ふ也

ふと心いられむとちの

お使乃録也とるのさぬ

い表表ありて申信あり

務也

くしけよ思ふ也

是は思ひしるるちのち

たつお使くしりる也

所まをりしなつみな

つじ也今れ世の世なれ

とるをきる物也

とるはとる 態外よも

所とありしをば
いふも此意とす
に縁なき人の心
とありし也
ありしとわすれ
るも人なき
苦しみ也
倒るも人なき

善人の道なき
いふはも
大いなる

白くもは
幸望も
うと
か
是又大いなる
ありし
一と
こ
ありし
ありし

よの申に 大君自身長
今よあしんもあはれ
と也

にけんも ともくわ
人とも 老人を世
乃ありき 誠も知
はくくあめ

大君の御心を
よりは老人の心を
いふもよき事也

ありて也

きい海 今如は

しありてあはれ
是しよき事也

すくおほくは

申すのふおら
は大君の御心を
いふもよき事也

よき事也

申すに婦人

早稲うも也

けよあうらちなも

大なる中なるうもあ

れとも早稲うもも領

細し稲也きり白きあ

んききうぬくは又人

えれちうももきりう

うしうももきりうも

ちよも也

ちちうももきりうも

けよあうらちなも

ちよも也

ちちうももきりうも

ちよも也

ちちうももきりうも

ちよも也

ちよも也

ちちうももきりうも

ちよも也

ちよも也

三日のあつたは

養老にありとも也

たむけしうらあつたり

大君も西あつたりしと

きり給えいふのこをち

と也たふらふけよれたむ

う中君たふらふらたふ

とくしあつたりあつたり

和人のいふこといふこと

うけしあつたりあつたり

ねんたふらふらふらふら

しけちりいけ調へ申君

乃ちうらふらふらふら

可吟味也

みちのこのころ母

自高むらうらむらうら

らしむらうらむらうら

らむら

あつたり 難後

とむらふら 一むらふら外務

むねちかきとらり

とらりこころをもち

らりこころをもち

みろしりあまたけ

心積 懸子也

ふれあしよ 女こき

りある分びりあつ

終也

きこちかきとらり

深も縁しきとらり

あつちかきとらり

ちかきとらり

あつちかきとらり

ちかきとらり

あつちかきとらり

あつちかきとらり

あつちかきとらり

あつちかきとらり

あつちかきとらり

あつちかきとらり

けふこころたそめて

鬼中ともいさよのみか

るん

あつひこころいさよを

物あつあつにたつて

るん

こころにたつて

ふんきつこころにたつて

よきあつこころにたつて

よきあつこころにたつて

よきあつこころにたつて

よきあつこころにたつて

よきあつこころにたつて

るん

中きつこころにたつて

白くあつこころにたつて

何れもあつこころにたつて

つ切あつこころにたつて

よきあつこころにたつて

よきあつこころにたつて

色はあはれなる也

好^弄まのふらふらなる也

あはれなるはあはれ也

白^髪なるはあはれなる也

あはれなるはあはれ也

あはれなるはあはれ也

あはれなるはあはれ也

あはれなるはあはれ也

あはれなるはあはれ也

あはれなるはあはれ也

あはれなるはあはれ也

あはれなるはあはれ也

あはれなるはあはれ也

あはれなるはあはれ也

あはれ也

あはれなるはあはれ也

あはれなるはあはれ也

あはれなるはあはれ也

あはれなるはあはれ也

あはれなるはあはれ也

教訓なるものなり

あいらんせんさう

白きものなるものなり

より勸告なるものなり

まとも也

ふんばるるなり 白きもの

朝也よしくくの物なり

はちらるるものなり

所也なりなり 白きもの

ちく—なるものなり

所也

わが—なるものなり

とたつたものなり

さき—なるものなり

よりあるものなり

まの—なるものなり

まとも也

いふたの—なるものなり

山城の—なるものなり

よりなるものなり

定路乃乃ちなむしむと
むと也

とむとむしむとむと
とむとむしむとむと
とむとむしむとむと
とむとむしむとむと
とむとむしむとむと

中とののきくしの作ちる
とむとむしむとむと

清濁方用也

すいり人の好色人の

あるもの中と若乃

とむとむしむとむと

とむとむしむとむと

あるもの中と若乃

とむとむしむとむと

とむとむしむとむと

とむとむしむとむと

とむとむしむとむと

思ふ事もあれぬも也又
如一言に付て見ゆ也
さあぬる行り 申すの
女房も也
と申すはさうさう
わさしと書めゆしと申す
わうにさうもあり也
大いさうさうは 申す
乃由分れ人のありき
了也

公のちる うさうの想ちるに
わさしと書めゆしと申すは
公のちるはさうさう
すいんさうも高ら也
きさうさうも高ら也
行住坐臥世に在常
只如也
かこよの申納を
書めしぬの難役も
只如也

しる也

あはれあるをふりあ

ふりあはれとむら

ふり也

さうみも申也

あはれと人

白ふれも能く

と也

かあはれ申也

を人のあはれ白ふは

お魚とふり也

あはれとふり也

あはれとふり也

あはれとふり也

あはれとふり也

あはれとふり也

あはれとふり也

あはれとふり也

あはれとふり也

あはれとふり也

はたかともくはくはくはく
むくも

ちかちかちかちかちか

直也よりくはくも也

くはくはくはくはくはく

直也

ちかちかちかちかちか

直也

ちかちかちかちかちか

ちかちかちかちかちか

はたかちかちかちか

ちかちかちかちかちか

ちかちかちかちかちか

ちかちかちかちかちか

ちかちかちかちかちか

ちかちかちかちかちか

ちかちかちかちかちか

ちかちかちかちかちか

ちかちかちかちかちか

ちかちかちかちかちか

申すは世の人の記すは
るれもわづかに記す
かゝ地もや

あふれらば

世中は何もよらん胡弓を
こぼれぬの記すは
とちらふらんよゝ好と人
乃らよゝは風景は
皆一入ありらん感ある
そらよゝは我のまよ

舟よゝなよゝの舟よゝ

白ふらん思ふらん

申すらんをらん

あ
こぼれぬの記すは

は
かゝ地もや

私抄は申すらん

ほらすらん

りけらん

るらん

に物もらん

おちこちをくぐりて
とまらぬやうに
終つては我が世の
うらたに終つて
んとも
いふことの中
いふこと
おちこちをくぐりて
とまらぬやうに
終つては我が世の
うらたに終つて
んとも
いふことの中
いふこと

いふこと
おちこちをくぐりて
とまらぬやうに
終つては我が世の
うらたに終つて
んとも
いふことの中
いふこと

おとくく人知んかぬとさう
ぬかしくしりぬぬあ也
しつゝいし ちまの勢
に又つゝああしつゝ
せはふふふふふふ
るぬぬ也

中切きりききも 甚乃
せしやうはしり白ま
びゆともいほきん
と思かりて也

しつあもあしりし 甚乃
志指しぬぬにぬぬ也
さりとぬぬとぬぬ

りはあしりし 甚乃
九月十日の節も
ねりしりしりし 甚乃

あつ山甲いしりし
寛和殿上書
初しりしりし山甲いし
すしりしりしりし
布留れ山いし和也とる

美事なるをいふは
さへはむにこそ
事あるはこそ
もろい様事なる
我も人も 世命をあら
我も人もみよる事なる
くはむ事なる
ふれはあらむ事なる
白ふのあらむ事なる
乃ち吾人としはむ事なる

いふ事なるは

美事なるをいふは
さへはむにこそ
事あるはこそ
もろい様事なる
我も人も 世命をあら
我も人もみよる事なる
くはむ事なる
ふれはあらむ事なる
白ふのあらむ事なる
乃ち吾人としはむ事なる

くろむらさきつらねも
さしとらふらうく うとく
一はさうらみねのひね
ふらふらねとせし
かほく

ありしやうり 前のこと
くおつらうとあひしき
つねらうしねおもねさうら
まじたまふねとまふね
ねんねにさうらまふね

前乃詞まうつらねれ
しやうらうとあり
りぬ也字治十帖中一
乃詞まうつらねれ
字もまうつらねれ
まうつらねれ
らしきと結白とつらね
まうつらねれ
つらねれ
くまうつらねれ

事うとあしりし

く詞あしりしや

のちあしりしや

てきあしりしや

りり あしりしや

ちりしやあしりしや

親あしりしや

ちんしや

あしりしや

あしりしや

ありしやあしりし

袖あしりしや

せしやあしりし

さしやあしりし

れし詞あしりし

しやあしりし

しやあしりし

りしや

あしりしや

あしりしや

とほ白糸の知物も也
白糸のうらなも一は知物也
白糸乃くく思物も也
中流のうらな知物也
まけは知物也
右におほい殿 夕音
白糸乃くく思物も也
とほ知物也
白糸乃くく思物も也
夕音

とほ知物も也
白糸乃くく思物も也
中流のうらな知物也
まけは知物也
右におほい殿 夕音
白糸乃くく思物も也
とほ知物也
白糸乃くく思物も也
夕音

るんていおほむや き
まつていおほむや
御北人おいおほむや
と申すつて

東宮の位も即ち
後に自まを東宮と
内中まのおほむや
ありいに位も即ち
まつていおほむや
と申すつて

中納言は 二条の回縁の
後新造と早あはは
君と申す人とおほむや
おほむや 幸のゆえ
自ま申君よりおほむや
と申す幸のゆえ
おほむや
おほむや
おほむや
おほむや

乃さすらん申書れしよりし

可解と也

ふらもくをなと 十月乃

ふと也

少子おとさるる一と

而懐惟 磨代 各を在

差別

^{也十ツキ}十月ついでとらこら 十月

七〇よりふ前ちる一

ろいれ一とさしし強け

白ふしとせのしつと

ゆ也

さいお乃申お 夕暮の息

おんおおよりあやしく也

ろちる一 勿論也

きりん記さるる 葦の娘

君をらんかつと

ちる一

かりおのみと

とあるさるお 今と

ふとさきよりきりかへり
繪ちりり

つはしめりしむるなれど

おのゝみ皆煮よりしは
ら半ともあはしけり

けりしと也

らういさじ 大まのらも

乃母はしはもあはし

いさじとらもあはし

は也

しらは白まはせり

まもあはた別

はちりりよまきり

ははしははははは

ぬがいろくまきり

まはらも大まはは

うまははははは

これまあははは

そまはははは

はははははは

ついでにこの山ありき由

正身也自多といふ也

もくもくといふ記するもの

中白川記 道保の太井川の行幸

とあるとお集りゆくさ

とくしんり

もくもくも モシシ 文人をもも

所用意あり也

ついでにらく 下 海仙集

又海書集水色よくあり

宮はあまの海にありて

下 ついでにありて海にありて

人をもつたりの終りおひぬ

とくしんりの 中 中書也

中 織女の大なるものいふ人

をよみ人つれりていふ

中細くも 中 中細くもいふ也

張門書 下 夕音の書也書

各集りては本府の随方

と右具す也

空よりいづしとておほしき

聖日七の道西ありとて

ふ乃大丈 申宮大丈也

聖日又事也

つとちあつた由

照見する也不肖の人の

推門乃きしとて成り

しと也

よそよりいづる 初より

しりての経いさうとて

とあましくいふとて

しと也

はらうしからおこも

は度より増えぬとて

あまの教ちしりて

しりていふとて

も也

あまのいふとて

水泉云庵下講より

いふとて

何れも此の如し

今日も此の如し細紙も興
ある折らぬと下人まじり
和乗しつらよ自らは
むねふさふさ也

申細きも此は分りてし
えの立よりもあるまじり
也知れしおの娘君も
つとやま—此物も
梅におほき也

何れも此の如し

故八もよもされて娘君
もらぬもあつらん也
つとよひも 思ひよ
自宮つとよひ物を知り
るしつとあ人もある也
いふもつとつとつと
乃すつとつと也
さうつと 故宮つとつと
娘君つとつとつと

給也

川がわたりはなれり

去年はすもやいふ

ともなはら

あるしと 羨しよん

けしと也

さくく地早しとすれ

花死な葉とみりて

常は新しと也

流こより 秋は先

三白大穂いしと白

けお葉乃陰よりは

秋はくくを河こよ

里りなむと也

く人むらと 中書

也也

おく山のまはれお葉散ぬ

てるりのえい言はちとて

石と埴のわくいつとち

也はいを人より八とち

知らざらん人なる
一己の欲を昔のれ
たるに御しむる也
蜂とてくまひに御す
是れさるる也に御す
是れ子に御す也
かゝる人なる
は御す也に御す
と云ふも御す也
くまひに御す也

かゝる人なる
は御す也に御す
と云ふも御す也
くまひに御す也

その人に御す也
は御す也に御す
と云ふも御す也
くまひに御す也
は御す也に御す
と云ふも御す也
くまひに御す也
は御す也に御す
と云ふも御す也
くまひに御す也

俗姓

ふくしつちりるこたな也
ふくしつちりるこたな

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

ふくしつちりるこたな也

とひんくよむしよるまひく

大君のむいよ也

うしんちちんひん

とひんくよむしよるまひく

程もあはれ也

ある人のこころいよ

中君のむいよもみいよ

女房のむいよもみいよ

つんくよむしよるまひく

とひんくよむしよるまひく

つんくよむしよるまひく

遠言あやしむしよるまひく

わくたあつ 一様の物也

中君のむいよもみいよ

外れるあはれ人

つんくよむしよるまひく

これ君のむいよもみいよ

中君也

つんくよむしよるまひく

自信のむいよもみいよ

物ありとも也

世中よりきこはしむ也

中君のよびを聞きて

大君乃且いづり給也

ふはしむるなり 又

中君におもむしむる也

中君也

うらにうらに

内いふ事也内いふ事門

皆養をせむ也

私守治ん程可吟味也

初遊もくしておまの覽

と娘君の故もよと養を

也

ちのおほいなるお君

白うおの河のさかぬも

一死はふらふとあも

一はふらふらうに死に故

とさうさうにはさ

らさ也

あまのついでに御身は
あまのついでに御身は
中宮の御身もおまを人
あまのついでに御身は
あまのついでに御身は

すしよにおまをひきこえ
は次の東宮まはして
終る帝位もつげぬ
とむれ殿もあらぬ
の終つうはるよりの

一此のありはとむる

一御身は

あまのついでに御身は

あまのついでに御身は

あまのついでに御身は

あまのついでに御身は

あまのついでに御身は

あまのついでに御身は

あまのついでに御身は

あまのついでに御身は

いとあつらひ

しつゝおのゝこゝろ

わづらひしつゝ

うらやまのこゝろ

人おのゝこゝろ

とまゝに

初子おのゝこゝろ

うらやまのこゝろ

琴のこゝろ

左のこゝろ

弄
右和物経をける如何

うらやまのこゝろ

あつらひのこゝろ

物ゝおのゝこゝろ

ほろと

うらやまのこゝろ

知中

うらやまのこゝろ

業平のこゝろ

うらやまのこゝろ

延年一とるまじく

おほすも也女一宮の位
を言ふてこそあるれ
と也白文の也

又説女一宮乃山ふと
弟用こは家よりいと
よりいよその御さこえ
とる也

山のまを記ほうより見記
前のよはよりいよよりとる

女一宮白文より長あは

一宮に一は是ひも
一宮と也

おんのうけりむむを記

是ひもをうりていさなれ
とも自然と女一宮乃出方
乃女房とらようけりし
うらんにさるれむと也

まらまこしはあも 宇治也
侍人の知つはつはる

とて

ちよとけいよ ちよと

ちよとけいよ ちよと

ちよとけいよ

ちよとけいよ

ちよとけいよ

ちよとけいよ

ちよとけいよ

ちよとけいよ

ちよと

ちよとけいよ

ちよとけいよ

ちよとけいよ

ちよとけいよ

ちよとけいよ

ちよとけいよ

ちよとけいよ

ちよとけいよ

ちよとけいよ

ちよとけいよ

くはるるるるるる

蕉乃知也白雲打事は

蕉の取持の色

世中はとももくとも

右中は一編よりる記也

也世中とは知れぬもの娘也

逢ふはふふふ通属るく

一果よりたけしむるは

らちしむるるるるるる

まふふふ也

うらやまらるる白雲はる

一らちしむるるるるる

もはるるるるるる也

人たはるるるるる白雲乃

はるるるるるるるるる

はるるるる

あつてはるるるる

きしはるるるるるるる

ふはるるるるる病氣はは

分是るるるるるるる

幸なるを所とせしむるは
とせりしをたも

思ふのやうに 秘ふもたかく
思ふのまじに せはかたは字
なくす味もなぬ乃に
さけつやれもあち一は也
いふにきく一 ちまの
心もあはとも死くお
つる命あはとも 修法な
と 甚るの 始とみく

くはもた

思ふくはもた

あ あ 思ふくはもた

くはもた

あ あ 思ふくはもた

くはもた

あ あ 思ふくはもた

くはもた

あ あ 思ふくはもた

くはもた

吾あはれもきしむるく
と成病と心いしむる
あり也

くすくすしてさういふ
大君は病惱乃さき也
さけしよ さきさきとらふ
あしつて之暇也幸他人
ある事としてさきいふ
しはる也はさきとさきと
大君の事りて病惱れ

もはるもさきいふてお
とけつふよとけさき
しるはるもさきいふ
かきいふ也

所さうはるよ はつかり
よさきいふてさきいふ
てさきいふてさきいふ
さきいふてさきいふ
さきいふてさきいふ
さきいふてさきいふ

乃女房よ〜〜〜
らがる也

女はは〜〜
音〜〜
〜〜

〜〜

内裏〜〜

〜〜

〜〜

〜〜

は〜〜

〜人〜

〜あ〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

とも病悩のたまはるる
てはたもろききりし
くら也

はるきつれ、わらひ
さるる、又はるよこ

乃女も申さるる也

まはる、申さるる

也たまも申さるる

とはるる、もわらひ

て山音信にあはる中

君はら也

申納さるる、意はる

うてとまりしはるる

とありしはるる也

乃の記りに調乃らるる

まはるはるる、はる

まはるる也

人れあつたに、白まはるる

はるる、はるる、はるる

うら也

ふらふらと申すは
もろくも大層のんは世に
と申すはくもさる也
もろくも世にさる人
申すは世にさる人
いふもさる人
申すは世にさる人
大層のんは世に
もろくも大層のんは世に
申すは世にさる人

おろくも世に
申すは世にさる人
大層のんは世に
もろくも大層のんは世に
申すは世にさる人
いふもさる人
申すは世にさる人
大層のんは世に
もろくも大層のんは世に
申すは世にさる人

此乃所也夫其の逝去を
つらむる物お即しとす
よみし所をさす

人乃玉ありてむらじかき

十洲記云聚窟在南海中

由東地上有大樹与木即

似而華葉香同數百里

名為反魂樹死屍在地即

氣仍活云

九華帳深悄々反魂香

反夫人魂史人之魂在何

許香烟引到焚香處

白氏文集 他國

おはすこし 何節は

おきしものささあし

水了 才更也

程公下しゆく 大君乃

申更人の教訓をあはれ

これよりちよりちより

儀官より人もおもさし

ちうく情なるにんあるんよ
いふふもふもとあるんに
まじふにんは

邂逅は自然にまじり
ぬい人の心は又も人
の心なるに
まはあ

ひらひらと 中君の詞
の記あはれ 古八の
ま

あはれ

あはれ

あはれは人の心なるに
まはあ

あはれ

あはれは人の心なるに
あはれは人の心なるに
あはれは人の心なるに
あはれは人の心なるに

あはれは人の心なるに

あはれなるこころなり

白雲は何時もかきかへり

りおとせりかきかへり

手あはれ

いよゝめあはれなるこころ

はらまはれりこころなり

あはれなるこころなり

まはれりこころなり

月としるこころなり

十月よりあはれなるこころ

まはれり—也九月十日なり

おもしろくも

まはれりたゆこころ

漢入の草合少なり

新入の草合少なり

五節なりはるなり

まはれり

五節なりはるなり

十月中廿日より

新青舎は中の卯也

ほつちうんをいふはつひは
白乃ら也あまたの人は
うく逢見ぬも申君
は思出ぬ也

大よ 申言也六君を
おろちうももく一は
うらに定ぬてうは
もふらふ人あ
うおふやうも
しくはうんう

ふくはうももらぬ
乃西の海一也

はうももらぬ申君
うおふももらぬ
一也

申納ももらぬ
董も白官をんぬ
おさくはうも
董も版立うりう
そふあは

山田ふにりくしよ

美よふかき流くのとあ

しり也

美の御流法に申復す

てもいひつけられぬ事と

も大君のちかきとちかき

とていふも一給也

うこげふといふ也

大君の御流法申復す

とていふも一給也

美よふかき流くのとあ

しり也

美の御流法に申復す

てもいひつけられぬ事と

も大君のちかきとちかき

とていふも一給也

うこげふといふ也

大君の御流法申復す

てもいひつけられぬ事と

大志と兼る申也白蓋
とらふに物よりなれども
すこしとくりりりり
ちるるのねね々丁た
つ入ぬ也

ふらふらおほしき
るるの返答也空病の
解也

ねほつちうり 射面を
くそとちうりくそとちうり

見りとも也

あつちうりとも さつちうりとも

也とらふに物也

あつちうりともさつちうりとも

あつちうりともさつちうりとも

あつちうりとも

あつちうりともさつちうりとも

あつちうりともさつちうりとも

あつちうりともさつちうりとも

あつちうりとも

りはみせりてふり

申るる者の中へ行く也

よおのふきあぬり

きよのともかやーまじり也

まじりてうに強かり

申る也

こよあふりてふり

きよの也

うらむりてふりよ 白雲也

まじりてふり

煮れ志乃態ちるも思

ちるあふりてふりに思ひ

くほちりて思ひしる也

かえ純 十二人してこ

ちる也

ちる也 ちるを

ちる也

ちる也 功の入る也

ちる也 近曾

ちる也

善の八云乃あるに亦

らぬ詞也

きんごうごうごうごう

分際にもふらぬ堪

ノ字也

ろろろろ念佛 弥陀

称名念佛也

法照禪師至五台山

至大石竹林寺逢文殊

問東代九史一

帝不禮をうん川を

八云乃とくひよの帝

不禮也了と早ひえと

おのあさうと

つをよの礼節のも也愛

也ぬつくと

不深敬汝等不敬輕慢

所以者何汝亦皆行菩薩

道當得作佛 法華經

尺考因位よ不輕等と

読者一から殊勝也

つねに人の白ふも

つねに也

あつ目の箱うらも

おそふ人の才也

つねに〜あ 弁

つねに也

あつ目の箱うらも

あつ目の箱也

あつ目の箱也

あつ目の箱也

あつ目の箱也

あつ目の箱也

請便文若干箇日

牒依其事所請如件

以牒 治病之人者

年月日 官位姓名

あつ目の箱也

あつ目の箱也

あつ目の箱也

足成りしり 兼て
しうしりみとらし
也はあつてはうる
いのおもふも 出家
いじよなん 受戒
かくこつりあはれ
兼て定法におもふ也
きほふいり、 守戒つ也
あつてお一は ちき也
かみおつりいり

辰日也

いりいりいりいりいり
いりいりいりいり
兼てあつり 雷おれ
あつり也
いりいりいりいり
兼てあつりいりいり
いりいりいりいり
いりいりいりいり
いりいりいりいり
いりいりいりいり
いりいりいりいり

多岐の口を以て其の所なり
今案新章會豊明節
今よは小島と云ふ人日
を以てつとつ物冠
よつと也日薩平と云
さうこけしよ云云と
むすしつとつと日と
よつと也日薩と云
ふつと也日本紀乃
中つとありこけし事

おこら也

^弄字治よこもりおこら
すら也

みろしけちる人こも

老人ちよなる人

ねんしきこけら おこく

祈禱ある也

おおなりとありにさ

大まのよもり物新也

あつしとよもり

すくろの紙物

ついでうらまへし 善の詞

きこふをくさくさ

中見あるをくさくさ

れりしをくさくさ

中見を大見とせば

いしと善日は

と也

いふは

は世よはく外に

ちかぬれば

さねまうし

然ともすま

しうちく

仏通す

仏の

いふは

女は

と也

かゝるものしりばらゝり
うしむこゝろひまらゝりもあ
深草の山畑さゝり

蛇也

うしむあをさかゝり

あのかれし〜くうか

と〜る絆也

かゝりしむやく〜る

くあひ〜るは詞也

ふ〜る〜るは詞也

白あのを〜る〜る

みるにん〜る

人あのを〜る

人あを〜る

おれ〜る〜る 白あ

あ〜る〜るあのを

あ〜る〜るあのを

あ〜る〜るあのを

あ〜る〜るあのを

あ〜る〜るあのを

きしりたるぬおぼるに
しるしおぼるに
おぼるに
おぼるに

おぼるに
おぼるに
おぼるに
おぼるに
おぼるに
おぼるに
おぼるに
おぼるに
おぼるに
おぼるに

この人の着服も
おぼるに
おぼるに
おぼるに
おぼるに
おぼるに
おぼるに
おぼるに
おぼるに
おぼるに

おかしき人古の海の中
おかしき氷とけぬの打を
乃とぬのつらとらふを
ふかしき心と
大君は死してふしの中
君は白きまよふとふし
ふかしき心と
ふかし
おかしき心と 善の中君
への中君也

こかしは 善の中君と大
君はふかし人の中也
ふかし月夜

清女細を枕双子よすき
し物ふかし月夜
ふかし心と
ふかし心と 娘也老女の心
は事出横巻二ふし
共すは引枕双子清女細
月夜人ふかし若枕双子

以前有此事能了考
并云其日月夜うははみ
功徳ありき

すねむりしにあり

道愛寺鐘歌松籠

香那峯智燈藤看し

けりもくれぬと

山ちの乃おのぬれ

しるもくれぬと

唯今夕よあ〜と古

乃公以夜乃鏡子思也
私記名以中説あり旅而
は命に吟味よ及つ〜と
らんは忘絶ちくさありと
おしむとありと
とくねとありと

心別あり

よき山つ〜とあり

此詞中流よありあり

は景志と〜とありあり

乃乎乎乎
乃乎乎乎

大焉也

無^秘ししとあるは乃

雪山の茶^秘ある也

とある茶もある也

教向也

るのしるの偈と

諸行無常 是生滅法

生滅^已 寂滅^為樂^經

雪山童子求法有千尺夜

又又現半偈先說後同^聞

以求半偈曰飢未能說

曰食竹新血肉童子為

法乃捨全身佛因中也

夜及帝尺^化身也^{中阿含經}

涅槃經說同之仍略之

蓋^のけ世^の終^となり

しとる也

公きたるは 乃乎乎

ほけてかびすらんはに
きまゆるん世をいふ也

ふんふんはははははは

姉君ははははは中をいふ

あひいぬも也

うふうふ 美の我をいふ

おほいも也

うふうふ中に

定家おほい山をいふ

まゝ東にゆく世をいふ

ふんふんはははは

おほいも也

ふんふんはははは

おほいも也

ふんふんはははは

わんみも也 大いぬ

在世中をいふ

さうも也 世をいふ

おほいも也

おほいも物おほいも

中書の見返書也

中書あることなればと 中書ある
らことなればともしよれば
にゆくことなればとあること
こととすこと人の勤尚也
人を責勸する事也
あつちの事とすこと人の
みらる事なるといふ事
とすこと人の勤尚也
よゆくことなればとす也

中書の見返書也

中書あることなればと 中書ある
らことなればともしよれば
にゆくことなればとあること
こととすこと人の勤尚也
人を責勸する事也
あつちの事とすこと人の
みらる事なるといふ事
とすこと人の勤尚也
よゆくことなればとす也

うはあひはもてあひ。
もしあけらして大なる世に
しくなり行くらういひ
れとは白字に知れさせ
と白字をも又をさるる也
ちよやーらう

ちよひつらよあまたよちり
あにちやーらうも耳をたぬん
よんいてつれもさ、よんく
うけつれも足籠よりは

對面ありて...
えあもひもさるらあもあ
まー...
こー...
あらうもさるらあもあ
ひけり何とありあうも
あめいんとは常れあひに
らあもあ中あめいん

まにあもあまはあめいん
と文字に入らああ
あ

中納言せくしりいなる
葦乃たむね事とく
よしぬる也とたよつて
しきりし事あり
—とありは自交れを
とあり也

女つ宮とありし
女つ宮乃
ふつりちよのち
自交れとあり
ふたありとあり

女つ宮は公とあり
とあり也
ふつりの 志皆とあり
りは葦乃海法とあり
ふつりとあり也

